

昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
（毎月一回・十五日発行）

（通第一〇八号）

# 慈

# 光

第十卷

第三號

## 目

真心徹到……………近角常観…(1)

一枚起請文……………花田正夫…(5)

白杵先生御講述の観経……………福島政雄…(8)

噫歎異鈔十三章……………三瓶徳英…(11)

## 次



真 心 徹 到

近 角 常 觀

他力において徹底するとは、罪惡の自覚が、如何にも悪しさが思ひ切れて、救済の自覚が、如何にも中心充滿することが出来た有様である。所謂、機法二種の深信が徹底したる告白である。

他人の事ではない、自身の事である。考へた問題ではない、現にこれ罪惡生死の凡夫である。過去をかへりみれば曠劫已來、常没常流転である、未來を考へても出離の縁あることなし、実に一善も一行も取るべき点なく、如何なる罪惡も、如何なる煩惱も具足せざることなしである。実に長々悪くありました、現に悪い頂上であります、永劫悪いことの止む奴でない。

有難い哉、慶しい哉。かくの如き私一人のために、御心を傷まし、御身を悩まし奉りしことの勿体なや。大悲の親は、一一私の病、私の苦、私の罪惡を知ろしめして、虚仮不実の隅々まで、残る限なく照見したまひ、よくも〜お

見捨てなく、哀愍授受したまひて、御遣る瀨なき大悲大願の御思召を以て、飽くまで清淨真実の御苦勞を経去り、經來りて、遂に正覚を成じたまひて、今日今時まで、待ちかねたまふ御親心、大悲招喚の御親切、実に親様御一人で御座ります。

嗚呼この親様なかりせば悪さの分かる奴ではない、永劫助かる奴ではない。しかるに幸にこの本願に遇ひたてまつり、此親の真心が徹到して下さつた。

嗚呼長々悪くありました。今日限りあやまりはてました、よくも〜も今日まで御見捨てもなく、御目たるくも思召さず、御手引下されしことの勿体なや。

今日初めて大悲大願の思召を承りて、生死流転の無明長夜に迷へる私が、尽十方無碍光の真実の親心を頂き、一念帰命の夜が明けたといふは如何にも有難や、勿体なや。実に値ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして、

今聞くことを得たり、と聖人の御慶びなされし儘が、直に是れ現今の我身の慶びなり。和讃に曰、

釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し

われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり

真心徹到するひとは、金剛心なりければ

三品の懺悔するひとと ひとしと宗師はのべたまふ

真心徹到、々々、実にこれ他力の徹底したる味である。

さて、悪いけれども助けて下さる、助けて下さるけれども悪いことは止まぬ。これ実に不徹底なる信仰である。それ故、御助けと頂けど悪しさが氣にかゝる。御慈悲に疑ひはなけれども、如何にも我身の罪の深さが案じられる。これらはみな不徹底の状態である。全体、悪いけれどもとか、助けて下さるけれどもといふ言葉を用ひるのが所謂煮え切らない。我身の悪しさを御助けで打ち消さんとし、又御助けを我身の悪さで打ち消さるるのはいかぬ。悪いものは悪い、悪るかつた、よくも〜悪う御座りますと、悪さを懺悔するに一点の未練はない。

我身は現にこれ罪惡生死の凡夫で御座ります。長々悪う御座りました、また致方なき奴で御座ります。これが深信する有様である。或人が入信の一念に号泣して、

「今日限り親様一人に御座ります」と言うた、是れ実に深信の有様である。徹底した有様で

ある、所謂決定した有様である。

近時、やゝもすれば信後妄念の止まぬといふとき、若存若亡といふ言葉を用ひる悪傾向がある。若存若亡といふは所謂煮え切らない状態である。一度真心徹底したるときは決して若存若亡ではない。中心より廻心懺悔して徹底したる有様は金剛不壞の真信である。三品の懺悔する人と等しと宣ふが実にこの点である。此一念帰命の味が分からぬゆゑに若存若亡といふ言葉を用ひるのである。近時動もすれば、信後妄念のつもりで此言を用ひるなれど、忌憚なく言へば信前不徹底の状態にあるのである。三不と戒めらるるも是である、執心不牢と仰せられるもこれである。或人の真心徹到されたときに「嗚呼、長々の間、權化に止りて居つた」と申されたのも、実にこの状態を懺悔せられた言である。

然らば如何にしてこの徹底したる状態に入るか、換言せば、如何にして真心徹到するかといふが、今まさに言はんと欲する点である。

一例を取らんに、親が我子の悪しきを見て、遣る瀨なく思うて色々教訓したる所、怫然として色をなして立ち去つた。その気色のただならざるを見て、親が追尾して行つた



所、將に水に投ぜんとするのであつた、親は驚いてこれをとめた。その止める手を振りはなして今や水に投ぜんとするのである。親は無理に引き止めて、我が悪かつた、帰つてくれと言つた。この時、子供は澁々ながら親に引かれて帰つたといふ説話がある。

如何にも親のやるせなき親心をあらはせるも、澁々ながら親に引かれて帰つたのでは未だ煮えきらぬ。親が是非帰つてくれ、汝が帰らぬならば我も独りは帰らぬ、どうかかゝるまで思ふ親の心を察して呉れと、涙ながらに申された時、子供は思はず知らず頭を垂れ、涙を流し、嗚呼悪かつた。許して下さい。かくまで御心配かけしことの勿体なやと、五臓六腑に浸みわたりてあやまりはてた一念が、実に真心徹到である。廻心懺悔である。

或人が申された。今迄は少し暖いことあらば熱いと云ひすこしく嬉しいと大に天に踊り地に躍るやうに申した。ところが真に大悲の親様の御苦勞を知らして貰うたれば、熱いも、頭から糞湯を被らせられた心地である。悪るかつた、実に焼火箸を胸に刺された心地である。嬉しいも嬉しいも実に踴躍歡喜である。もとより常にその状態は続かぬけれど一度熱湯を被りたる暑さは忘るることは出来ぬ。

往生定るしるしには、慶喜の心起るなり  
慶喜の心起るしるしには、仏恩報する思あり

るところは、この願心ばかりである。

「信は願より生ずれば念仏成仏自然なり」この願が有難い。五劫思惟の御苦勞は仏は無駄なことはなさらぬ、私が悪いばかりに御苦勞下されたのである。「弥陀の五劫思惟の願をよく、案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと申し召したちける本願のかたじけなきよ」嗚呼我等が罪業なかりせば、如來に五劫思惟の御苦勞をかけ奉ることのあるべき。しかるによく、もそくばくの業をもちける身にありけるを、御呆れもなく、阿弥陀仏法蔵因位の昔、平等の大悲に催されて、愚痴無智、破戒無戒、貧窮困乏、煩惱熾盛、五逆十惡の私を御見捨てなき本願を建立したまひ、不可思議兆載永劫の間、我等三毒の衆生に対して、一念一刹那も清浄ならざることなく、真実ならざることなき御親心の有難さ、実に私一人の為に現れたまひし親心、嗚呼この親様ましますば、私は永劫の闇を破ることは不可能である。実に十方三世の間に、唯親様御一人で御座ります。

五劫永劫の一分一厘も無駄なる御修行はない、余分な善根はない。皆私自身に罪惡あればこそ親様に御心配かけました。されどその御心配は徹頭徹尾私をお見捨てなく、遂に正覺を成じて下さればこそ、私の罪惡の隅々まで、御慈

信仰の得否を他人が印可するといふことは決してない。

しかし「一念慶喜する人は往生かならず定りぬ」で、「おのづから仏のかたより往生は治定せしめたまふ」のである。愚禿鈔に、「慶樂といふは慶の言は印可之言也、獲得之言也、樂之言は悦喜の言也。歡喜踴躍也」と仰せられたは、たしかにこの決定したる有様である、真心徹到したる有様である。しかしながら返すも、自分きめこみの決定は不可である、我ばかりといふ獨覺心になりてはならぬ。得た得ぬの沙汰ではない、大悲の親心の遺る瀬なき御慈悲が忘れられぬのが真心徹到である。

私は仏に抵抗して居るけれども、私は私を見捨てて下さらぬといふが如きは、いかにも我身の惡さが分かつた様なれど、仏に抵抗して居るけれどもでは懺悔が起らぬ。嗚呼今日まで抵抗して居りたことの勿体なや。その抵抗するのが可哀想じやとの親心は、如何な罪惡な我なれど骨髓に徹入して、無限の大悲識心に攪入した。今日まで大悲にそむきしことの勿体なや南無阿弥陀仏。実にあやまりはてた弁円の心である。無根の信を得たる阿闍世の胸中である。

最後に至りて我等はこの親様の親心を能く聞かして貰はねばならぬ、これ実に「聞其名号」である。これ真に選択願心である。然してこの願心が有難い。真宗の真宗た

悲の届かぬ限はない。実に尽十方無碍光如來にてまします。よくもこの極惡最下の私をお見捨てなき御慈悲、実に極善最上の、万徳圓滿の南無阿弥陀仏にてまします。実に破闍滿願の不行、唯不可稱、不可説、不可思議と、一念歡喜し奉るの外はない。

此に於いてか、永々の間待ちかね下されし大悲の親様は、御満足に思召して、撰取の光明におさめしめたまひ、十方の諸仏も念したまひ、觀音、勢至も勝友とのたまひ、釈尊も善親友とほめたまふ。聖人は「極惡深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲る」と仰せ下された。これ実に真心徹到の結果である。嗚呼何たる幸ぞや。何たる幸ぞや。和讃に曰く。

五濁惡世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて  
ながく生死をすてはて、 自然の浄土に到るなれ。

金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ  
弥陀の心光授けて、 ながく生死をへだてける。

(注) 「三不」とは不徹底の信心は、相續せず、決定せず、純でないとの三つを云ふ



一枚起請文(一)

花田正夫

①もろこし我が朝に、もろくの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず。また字文をして念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。

②たゞ「往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申し、疑なく往生するぞ」と思ひとりて申すほかには別の仔細候はず。

③但し三心四修と申すことの候ふは、皆決定して「南無阿弥陀仏にて往生するぞ」と思ふうちにこもり候ふなり

④この外に奥深きことを存ぜば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候ふべし。

⑤念仏を信ぜん人は、たとひ、一代の法をよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、屁入道の無智ともがらに同じて、智者の振舞をせずして、唯一向に念仏すべし。

この起請文は、法然上人が多事多難の八十年の御生涯を

静かに閉ぢようとなされる直前、御形見の言葉を一紙に綴られて、勢観房に渡されたものであります。

又全紙に渡つて大きく、両手印をせられて証拠となされ、更に、あとがきに

「浄土宗の安心起行、この一紙に至極せり。源空が所存このほかに全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがんがために所存をせるしをはる。建暦二年正月二十三日 源空」との添書があります。

さて、第一の節について、次の上人の御言葉が想ひ出されます。

「近來の行者、観法をなすこと勿れ。仏像を観すとも、運慶、康慶が造りたる仏ほどだに観じあらはずべからず、極樂の莊嚴を観ふも、桜梅桃李の花果ほどにも観じあらはずこと難かるべし。……」

これを読むと、上人の長年の間、血の滲む御苦勞が偲べれます。或は妄念の雲を払うて真如の月を観せんとせられ、或は定水をこらして浄土の莊嚴を観じあらはさうとされた幾年月、現れようとす下から雲り、成就するかと思えて又しても崩れ、水に描く絵のはかなさ、そこに観せられたものは、名人の仏師の手になる仏像ほど及ばれず、浄土の莊嚴も、桜花の美、梅花の香り、桃李の甘味さへも感得せられず、「法は深妙なりといへども、我が機すべて及び難し」と崩折れ給うた御悲歎の姿が浮ぶのであります。そこに「観念の念にもあらず」の仰せがあるのであります。

次に「学文して念の心をさとりて申す念仏にもあらず」とありますが、上人は一切経の読破、すでに五遍、或は南都に大徳を訪ね、或は北嶺に碩学を求めて、そこに見出されたものは「経典を披覽するに、其智最も愚なり、行法を修習するに、その心ひるがへつて味し朝々には定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕々には出離の縁の欠けたること悲歎す」の行き詰りでありました。

惟ふに、我々が鏡面に向ふ時、そこに見出されるものは自己の姿であります。上人も教法の前に立たれては、他人からは智慧第一の法然房と讃へられましたけれど、御自身には「最愚、妄味」さが照し出されたのであります。斯く

て「念の心を悟りて申す念仏」の道は最早断念の外はなかつたのであります。

道元禪師も「仏法を学ぶといふは自己を知ることなり」と随聞記に述べられ、源信僧都は「夜もすがら仏の道をたづぬれば、わがところにそたづねいりけり」と詠まれて居ります。ことに僧都が「知目、行足を欠く、余が如き頑魯の者」と往生要集の初めに告白懺悔せられた御言葉に、私共は思はず襟を正されるばかりであります。

二

この「愚痴、妄味」の身に、第二段の仰せが、唯一無二の救ひの光をあらはして下さるのであります。

「ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには、別の仔細候はず。」

ここにも上人の捨身求道の御体験がある。即ち四十三歳の行き詰りである。渡りに舟を失ひ、闇に道を迷うて、愁情いよ／＼深く、涙と共に人師の解釈をひもとかれた時、「一心に専ら弥陀の名号を念ぜよ。……それが弥陀の本願に順することである」

との善導大師の御言葉に、ハツと胸うたれ給うて「余が如きの下機の行法は、阿弥陀仏の法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや」



と思はず高声に唱へて念仏門に入られたのであります。

親鸞聖人は、親しくこの上人の御告白を聞かれて

「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし、とよき人の仰せをかうむりて信するほかに別の仔細なきなり」

と、あだかも道綽禪師が曇鸞大師の碑文に心うたれて、たちどころに浄土門に帰せられた如く、聖人も亦直入せられたのであります。

さてここで私は「ただ……申して」の一句こそ、大悲の至極として感涙にむせぶ次第であります。

阿弥陀仏が、一切の衆生を救ひ遂げようとして下さることとは、換言すれば、如何なる極悪最下の衆生をも一機として漏らさじとの大願であります。それが観經の下品下生の者の救済として現れてゐる。即ち、十悪、五逆のあらゆる罪業を身にもつた者が、命終に臨み、善友が仏の妙法を説き「仏を念ぜよ」と勧め。然し身にもつ業苦にせめられて仏を心に浮べることが出来ないものであります。この憐れな姿を悲憫して善友は、更に、

「汝もし念すること能はずんば、まさに無量寿仏を称ふべし」

と勧め、行者はここに十声の念仏で命終し、浄土に迎へられるのであります。極悪最下の者を飽く迄も御相手下さ

る、大慈大悲の心のやむにやまれぬ金言を、私はここに聞くのであります。斯うまで仰言つて下さることの有難さが身にしみるのであります。

近角先生の歎異抄講義に、著しい例があります。

「数日前にも癡狂して絶食して心藏麻痺で亡くなられた憐むべき人があつた、其人の近親が信仰家であつたために臨終に及びて力をこめて如来の御慈悲を説きて聞かせ、唯念仏せよと勧めたるに、口を指して、称へることが出来ぬといふことを知らした。然らば私が称へる故に、其心持になりたまへというて其人を抱き、頂に接して念仏しつある間に、頭をうなづき、心中大いに喜びて久しからずして亡くなられたとの事である」

即ち、その勧めを聞いて、心にあゝ有難いと頂いて、口に南無阿弥陀仏と出ぬままに亡くなられたのである。そこに仏の本願のまこととがとどいて、一声の念仏もまたずして、御救ひにあづかる不思議が知らされるのであります。

惟ふにこの段の御言葉は僅かでありすが「南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」と法然上人の御覚悟の自然に定まつた御胸中から、我等煩惱具足の衆生を、特に悲憫せられて、烈々火と燃えてほとぼしる大悲の御声であります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。仰ぐべし、信ずべし。

縦令一生造悪の衆生引接のためにとて  
称我名字と願じつつ 若く不生者と誓ひたり  
道綽  
未完

## 白杵祖山先生御講述の観經

### 一、序 説

白杵祖山先生ろすきそざんについて、以前にも申し上げたことがあ  
ると思ひます。私にとつては第二の善知識とも申すべき御  
方であります。第一の善知識は近角常観先生でありまし  
て、私は近角先生を父の如く、白杵先生を母の如くに感じ  
てゐるのであります。その白杵先生から昭和十五年の八月  
十七日乃至二十三日の七日間にわたつて観無量寿經の御  
講義を拝聴しました。その聴聞の摘録が私の耳許に残つて  
ゐますので、これをたよりにして観經について少しく申し  
述べることを御許し願ひたいと思ふのであります。

先づ観經に現れる人物の中心第一の人は頻婆娑羅王であ  
ります。此の王の名の意味は顔色端正とか模実とかいふ  
訳名が示すやうに極めて立派な人物であつたことを示すも  
のであるといふのであります。心ばせもすぐれた人であり  
ました。釈尊がまだ太子であらせられた頃から深く太子を  
尊敬してゐた人であります。涅槃經の師子吼品を見ます

ば、(一)願はくば我年少にして王とならむ。(二)我が國  
中に仏あらしめむ。(三)我をして常に仏所に往來せしめ  
む。(四)常に仏の經を説きたまふを聴かむ。(五)經を  
聞いて心疾開解し須陀洹道を得むといふ願を持つてゐた王  
様であるといふのであります。須陀洹道といふのは小乗の  
悟りの最初の位をいふのであります。

頻王のお友達に弗迦沙王といふ人がありました。これも  
願を持つ人でありました。これは六大無碍といふことを悟  
りきつた人でありました。六大無碍の悟りといふのは地・  
水・火・風・空・識の六つが互に何の障碍にもならないと  
いふことを悟ることといふのでありますから、一切の世界  
が少しも心の障碍にならないことでありませう。

此の二人の王様の間に手紙の往復があり、弗迦沙王は頻  
王に金の蓮華をおくりましたが、頻王は仏陀を以て唯一の  
華とおもふといふことを申し述べましたので、弗王は非常



に感激したと伝へられてゐます。これによつて頻王の人の  
なりがわかるのであります。

仏説未生冤経を見れば、頻王が子をよく可愛がつた人で  
あることがよく現れてゐると承りました。冤は怨とちがつ  
て、無実の罪といふ意味であります。頻王が怨をいだいた  
とか怒まれたとかいふ疑問はこゝに解決するといふのであ  
ります。頻王が子を怒むといふことは決してなかつた。た  
ゞ阿闍世が提婆達多から誘惑せられたに過ぎないと信じて  
ゐたのであります。子に天地の悪あり、我れに絲髮の怨心  
無しといふのが頻王の心持でありました。

韋提希夫人は阿闍世が幼少の時に頻王が示された父の慈  
悲心を阿闍世に対して説かれましたが、提婆達多に深く誘  
惑せられてゐた阿闍世はこれをきゝ入れなかつたのであり  
ます。

次に韋提希夫人であります。此の名の意味は思惟とい  
ふのであります。思惟、思勝、勝妙身などと訳せられてゐ  
ます。此の身といふのは五識身といひます。たゞ身体とい  
ふことではないといふことであります。積集といふ意味で  
業果がつもりつもつて出来てゐるといふのであります。

次に阿闍世といふのは未生冤といふ意味であります。生  
れない前からの無実の罪といふことになります。提婆達多  
から色々のことを言はれて、それを信じて悪逆の事を行ふ

て、韋提希夫人は恐れてこれを高樓から地上に落されたとい  
ふことを物語るのであります。そして兩行大臣といふの  
が提婆の言を裏書しましたので、こゝに王舎城の大悲劇が  
起ることになつたのであります。

次に提婆達多のことではありますが、此の提婆に対する積  
尊は決して怨に報いるのに怨を以てするといふやうなこと  
をなさらなかつたのであります。徳を以て怨に對するとい  
ふ態度をとりたまうたのであります。もつとも涅槃經には  
今申しましたやうな痴人とか唾を食ふものとかいふ烈しい  
御言葉もありますけれども、併しそれは折伏のためであり  
ます。結局は法華經の提婆品に提婆達多善知識とあります  
やうに、広大無辺の御心を以て撰受したまふのであります  
す。此の折伏と撰受といふことはなか／＼その調節がむつ  
かしいのであります。私どもは此の言葉を軽々しく用ひて  
ゐるのであります。実際問題となれば非常にむづかしい  
く、その調節がよく出来ないところからあらゆる人生の苦  
悩が起つて来るのであります。

今日の我々は文化人といふやうな顔をしてゐますが、信  
仰の上においては凡夫の原始の荒けつりの姿にかへらねば  
なりません。親鸞聖人の和讃に

大聖おの／＼もろともに  
凡愚底下のつみびとを

けれども、それは阿闍世の本心から出たことではない、そ  
れで無実の罪といふことになるといふことでありませう。  
生れない前から怨んでゐたといふことであれば、心の底か  
ら父を怨んで、それが本心で悪逆の行つたといふこ  
とになりますけれども、さうではないといふのであります。  
婆羅門支と云つて、これは折指または無指といふ意味  
で、韋提希夫人が生れた子を恐れて高樓から地へ落して指  
を折らせたといふことが提婆達多の言葉の中にあります。  
これも提婆のつくりごとと思はれます。それは涅槃經の迦  
葉菩薩品に出てゐます。提婆は釈尊の教團を我がものにし  
たいといふ野心を抱いて、大衆を我れに付嘱したまへと請  
ひました。積尊はこれをお叱りになつて、舍利弗などは聰  
明大智の者で、世の人々が信伏してゐるけれども、これにも  
大衆を付嘱することはしないのに、汝のやうな痴人、唾を  
食ふやうなものに、何で大衆を付嘱するものかと仰せられ  
ました。それで提婆は恨んで悪心を起したのであります。  
此の時大地は震動して提婆は地に倒れました。その身辺  
からは大暴風が起りました。そこで提婆は深く積尊を恨み、  
必ず此の大怨を報ずると広言してその場を去りました。

これから提婆は阿闍世すなはち善見太子に逢うて、未生  
冤といふ言葉を悪い意味に解して、生れない前から父に對  
して怨みがあり、生長すれば父を殺すといふ予言によつ

逆悪もらさぬ誓願に  
方便引入せしめけり

とあります。此の大聖といふ中には阿闍世も提婆達多も  
含まれてゐるのであります。善人も悪人も悉く私どものた  
めの善知識となるのであります。

## 春の雲

筑紫野春草

垂れこめて重き雨雲押し返し大地より照る花菜田明り

春の雲うしろになして大銀杏清きみどりに芽をふかむとす

うれひもちて見る遠方の春の雲何ぞま白に軽らなるさま

道の辺の草にうづくまり行く春の雲見てあればうれひ忘る

山の端のひとつかたまりの春の雲おもむろに上り散りて消に  
けり

歌集「雲霧」より跋



噫 歎 異 鈔 十 三 章

三 瓶 德 英

近角大先生の御肉声で、又御著書で、歎異鈔第十三章の、超世稀有の難有い御教化を蒙り、昔も今も変りなき御導きに預つて居る事の幸福を感じて居ります。

さて昨年十月から年末にかけて、親戚の寺の住職が死亡し、院代が突如胃潰瘍となり困る故少し法要を手伝つてくれと頼まれ、檀家各位の報恩講を勤めて廻りました。

他僧と共に招かれた家では正信念仏偈と和讃、私一人の家では文類正信偈と、善導和讃の『釈迦弥陀は慈悲の父母』と次の「真心徹到する人は」以下四首を誦し、法話をしました。この和讃は、亡き父が檀家の報恩講に読んで居たのでなつかしく、特に父が死の前日、「しまつた〜」と幾度もいいますので、どうしましたと言ふと、お前に御慈悲を知らせなかつた事が口惜しいとサメ〜と泣かれました。

善巧方便の御手廻しで、二十九の歳に、私の大馬鹿者なる事に驚かされ、此様な奴故、可哀想との生きた如來、生きた親鸞聖人の御声が聞えた気がしました。

そこで檀家の各家での法話は、歎異鈔十三章のお話のみしました。それというのも、この十三章について尊い難有い思い出が数々あるからであります。

憶へば、昭和十五年秋、日支事変が最高潮に達した頃、早稲田大学理工科学生、中島忠博君（二十一）と法縁が開け、度々私の宅へ来て下さつた。

或日曜日、同君と共に求道会館に参り、常音先生のお話が終り、常観先生がこの十三章に関するお話がありました。アノ会館で、アノにこやかな犬先生のお顔、澄みきつた綺麗なお声でお講話が段々進展した真最中、私のうしろの椅子で聞いていた中島君が、突然大きな声で泣き出した

ます。それは、

すこしでも、よきことあれば迷ふのに

まるでわるうてわしはしやわせ

という文句ばかりで、私の脳裏に沁みこんで居ります。今日、会館で大先生の十三章のお話が、祖父の歌の源ではないかと思ひ、祖父の面影が幻の様に、仏様の様に見える気がして胸迫り、覚えず識らず声を立てて泣きましたとの事。

又、昭和十八年の夏、学校から推薦せられてアルバイトに横須賀海軍工廠に通ひ、米軍の飛行機の機関部を分解し、其組立に就ての計算を、海軍将校、選抜学生の一団十五六名が合算するまでは、何度でもやり直し、時々、四時間五時間も無休継続し、やつと美事合算し終れば、頭がボーとするので、裏の広場へ駆け行き、胸を張り、力一杯の大声で、ナンマンダ〜と数十回称へると、不思議に頭がスーと涼しく軽くなり、事務所に販り、茶や菓子や、御馳走など頂いて東京へ販る事が度々でした。

或時、将校が、君は広場で大きな声で、何を云ふかと問はれ、ナンマンダブツと云ひますと答へ、ソレは何の事かと云はれ、親鸞聖人の事など話すと、おれも一度聞いて見ようよと云はれたから、此処へ来るかも知れませんか……」

ので、先生はお話を中止なされ、参詣二百人近い人々が一斉にかの青年を眺め、私もうしろへ向いて難有いなあと流涕しましたが、すぐに先生は平気でお話を続けて下さされ、正午過一時近くまでお話は終りました。

同君と共に会館を出て一緒に歩きながら、私の様な奴に向つて、先生、今日は誠にすみませんでした、と云はれ、イヤ〜誠によかつた、私も難有涙が出たが、参詣の人々が数多くハンカチで目を拭うて居られたなど話し、大学正門前から電車で新大久保の私の宅へ販り、家内と三人で風呂をし、夕方まで三人で十三章の研究などもしました。

その時「あなたはどんな動機で南無阿弥陀仏が称へられるやうになられましたか？」と私がたづねますと、中島君は次の様に申しました。

「私の家は長崎県瀬戸町の農家、真宗門徒であります。私は祖父に非常に可愛がられ、幼時からお寺へ時々つれて参られ、朝夕御内仏を拝ませられましたお蔭で、正信偈と和讃を今日も読んで出ました。

祖父は庭掃く時も、風呂沸かす時も、畑仕事、山仕事の時も、幼時は大低つて行くと、何時も変な声で歌を謡ひ



夕刻中島君は、吉祥寺の下宿へ飯られました。四ヶ年の勝友であつた同君は、十八年十二月大学卒業後直ちに飛行隊に召集され、二十年三月、南方で戦死されたと、後に御父上から御通信を頂き、痛々惜々。病妻と共に悲歎措くあたはぬものがありました。

噫、この頭脳明析なる青年、金剛堅固の信者、何時も制服のポケットに珠数をいれて居た彼の青年、前途洋々たるアノ子を、ナゼ殺シタ、何人が死なせたのかと、戦争責任者を詰問したくなります。

戦死者の御遺族方は、さぞかし胸の涙が永劫かはきますまい、噫。

又この十三章を亡妻の妹の寺で話した時、某元飛行少佐の方が、親鸞聖人の鋭いお言葉が聞こえた。従来仏に向つては耳をかさぬと堅く鎖した私の心の扉を強い力で押し開いて下さつたと云はれ、その方と昭和二十五年以来、今なほ信仰の書信を取り交はして居ります。

又或婦人会で、この十三章のお話をして、後座談会を催しました。私の国では、座談会をしても中々質問が生まれ

## 法信抄

滋賀県 篁 龍 観

「他方、と言ふは如来の本願力なり」と聖人が申されてゐます。即ち、如来の遺る瀬ないお慈悲こそ、我々を救はんとする根本の願であり、それが南無阿弥陀仏の名号と成就されたのであります。この名号こそは我々を生かさんとする根本の力であります。

私は近頃、救済といふことは、現当二世に渡つて生かされるといふ風に味つて居ります。それは順境であれ、逆境であれ、如何なる環境にあつてもそのまゝに、本願力によつて生かされるといふ、有難い味ひであります。

私は一昨年暮、中風で倒れ左半身不随のまゝに養生して居りました最中に、同病で私よりさきに病臥してゐた妻に再発作で死別し、悲歎のどん底につき落されました。当座は全く虚脱状態で、今まで大言壮語した信味も崩れて了ひ、一時は五里夢中でありました。そのうちに追々と心も落着き、御聖教や、先輩の信仰書に親しみ、その一言々々が、全く私への御手引と有難く頂かれ、このまゝ如来の本願力に生かされてゐるのであると静かにお念仏申すやうになりました。そこにはほのかな感謝の念も湧いて参りま

んけれども、此十三章には倫理道德に關連した、業の問題、悪を作りたる者が助かるといふ造悪無碍の心得ちがひの異議など、質問し易い問題が沢山ありますから、長時間さかんに話合ひました。

其中、或婦人と応答して、話の筋から、毒と薬について、可愛い子供に向つて、薬があるからこの毒を飲めとは云へますまい。又譬へば、盜癖の子をもつ親が、お前は盜癖だから人の物を盗んでもよいと云ふ筈がない。しかしながら、汝の盜癖は困つた者だ、可愛想だと、どうかして癒してやりたい、とこゝろまでも見捨てぬぞとの仰せが、全く「悪は往生のさはりたるべし」とにはあらず」とのやるせない御なさけであるなど話した時、某婦人が泣き出されたこともありました。

ああ、歎異抄第十三章ノ南無阿弥陀仏。

昭和三十三年二月十五日。涅槃会の日。

す。それでも初めのうちは、強いて起してゐるのではないかとといふ反省も起りましたが、今日此頃では、何等の無理なくさう感じられて有難く思つて居ります。

この私の信境を適確に誌して下さつた人で、以前からお慕ひしてゐる人は、巢鴨の拘留所で刑場の露と消えられた福原勲大尉であります。福原さんが所刑の前晩十時頃に、嚴父と夫人に宛てられた遺書に次の文があります。

「人間は死を前に控へる時に、何の不平がありません。おかげで生かされる喜びに御恩報謝の道を、氣つよく、朗らかにお念仏を称へながら立ち上るべきであります。仏の本願が私の本願となつて下されて、御恩返しに道が踏まれるのであります。人をたすけたい心も起ります。この道こそはわが家を田満に榮えさす道であります。

勲はこのところを嬉しく思ひます、即ち不運を転じて我が家を任せに向ふ縁になつた事を喜び、この力こそ、恵まれるお慈悲の力であります。

この生かして下さるお慈悲の力がわかれば、これ以上の喜びがありませんか。どうぞ心の底からお念仏を称へられて、この無碍の力を遠慮なしに受取つて下さい。この無碍の力は金剛力であります。どんな逆境に落ちぶれて涙ぐむ時にも、それがために愚痴を言つたり、くよくよしたりする心の曇りになりません。念仏こそ行詰りのない道であることが、今はつきり解つて來ました云々」

この姿こそ本願力に救はれた御信味であります。



編集後期

今年はやく訪れて参りました。慈光誌も本月号で満九年を迎へました。信の友の月々に増して下さることを、何よりの妙宝と教へて喜んで居ります。

今までに頂きました御原稿も、あまりにも小冊子のため盛りきれませず、遅れて居りますことをおわび申し、四月号から増頁させて頂いて、漸次記載させて頂く積りで居ります。

△「真心徹到」の近角先生の御原稿は、法然上人門下で、信心為本を極唱された親鸞聖人の尊容にひとしく、取謂「養えさらぬ者への猛省」を促して下さるものであります。このかなめがはづれると、真宗の眼目を失ふのであります。一切の煩惱の薪木を燃やしつくさうとされる、悲心烈々たる仰せであります。

△「白杵祖山先生御講述の観経」は「南山の鼓、北山の舞」で、祖山先生と福島先生と相呼応されて、稀有の妙法を開筵して下さいました。祖山先生は昭和廿三年に御往生、これに直鷹齋でいよ／＼駄目と自覚されての御遺詠を誌します。

覚悟だに要なきまでに御仏の育てたまひし恵み尊し  
一息は一息ごとに死の巖頭  
こゆる御声は六字名号  
病をば御国の御手にまかせつ

しづかに称ふ御仏の御名  
碍りなくすべてを照す御光は  
さほりある身の上にごそ照る

△「噫十三章」の三瓶老師のお原稿は悪無碍に墮し易い私共に適切な信味をお領ち下さいました。ことに「盜癖ある子に親が盗んでもよいと云ふ筈はない」との例は心打たれる慈語であります。島根県大家局区内井田に御住居

△「一枚起請文」は法然上人八十歳、御入滅前の御遺誓で、一休禪師は「仏教随一の書」と讃仰せられ、純粋なものだけが、おのづとあらわになつてゐる趣は、竜泉寺の石庭の観があり、或は名入の刀剣師の手に鍊りきたへられた名刀のほびがただだまひ。更に、金輪から生え抜いた巖のたしかさを覚え、筆の動きもしぶり勝て、たど／＼しいものとなりました。御諒承願ひます。

後記を誌して居りますところへ、愛知果安城市山崎の聞信会の山本博雄さんから、多田鼎先生著「真宗入門」を頂きました。本当に有難い入門の書で

あります。御希望の方は山本さんまで御申込み下さい。送料共に百円であり

「真宗入門」より跋文  
〃大聖世尊は、斯世をば大法の講堂となさつて、斯法が、斯世の光でなければならぬことをあきらかなされました。聖徳太子は、斯国をば大法の道場となさつて、斯法が、斯国の魂でなければならぬことをおしらせ下さいました。親鸞聖人は、私共の家をば大法の宝座となさつて、斯法が、斯家の柱でなければならぬことをおさとしくされました。

定価	一部	十七円(送共)
	半年	百円(送共)
	一年	二百円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷	名古屋市千種区千種町馬走三八	
印	名古屋市南区駄上町二ノ二八	
刷	入 本田 政雄	
發行所	慈光社	
	振替口座名古屋一〇四七〇番	

慈光 第十卷第三号昭和三十三年三月十五日発行(毎月一回十五日発行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可